

「今、ここにある私の意識」とはどのようなものか —ウィトゲンシュタインの後期哲学を手がかりにして—

橋本 哲

1 はじめに

私は今、パソコンの画面に向かって論文を作成している。今、私が「私は今ここでディスプレイに表示された文字を見ながら考えている」と言うとしたら、これは「今、ここにある私の意識」の内容を正確に表現したものであろうか。「私の意識」と言う時の「意識」とは何だろう。

「意識」という語は、通常、感覚、感情、思考、行為等の語と関連して用いられる。また、「注意する」とか「気付く」という語の用法とも関連している。例えば、パソコンの画面の文字が「見える」、文の表現を「考える」、意識して「手を大きく振る」、エアコンの異常な音に「気付く」等のように。これらは意識あつてのことである。「意識」は、これら感覚や感情などが表現するものとは別の特定な心的な何かのことだろうか。

本稿で取り上げるのは、一人称・現在形によって表現される「今、ここにある私の意識」とはどのようなものだろうか、というものである。

このことを明らかにするために、次の第2節で「意識」という語を語用論的な意味論の観点から考察して、意識は感覚や感情などとは異なる独自の用法を持つ概念であることを明らかにする。その後、第3節で「今、ここにある私の意識」の内容はどのようなものか、その内実(クオリア)を現象学的な記述によって明らかにする。そして、第4節でそのようなクオリアを持つには前提条件が必要なことを明らかにして、その前提条件がどのようなものかを論じる。最後の第5節では、「今、ここにある私の意識」という一人称・現在形で表現されるものが脳生理学等の自然科学によって説明できるとする立場を取り上げて、それを批判する。

2 「意識」という語の語用論的な意味論の観点からの考察

「意識」という語は、一人称・現在形で用いられる場合と、それ以外の形式で用いられる場合とでは、異なる用法を持つ。

「彼は意識がある」という三人称・現在形の文は、それが用いられる状況を容易に想像することができる。例えば、ある人が交通事故にあつて病院に救急搬送された時、搬送者が医者にそのように言う場合である。そこで言われる「彼は意識がある」とか「彼は意識がない」という文には意味がある。

また、「私は意識があつた」という一人称・過去形の文についても、それが用いられる状況を想像することは容易である。例えば「麻酔の措置を受けるまで私は意識があつた」というように。従つて、過去形の「私は意識があつた」は、使用される文脈を持つ有意義な文である。このことは、未来形の「私は意識があるだろう」についても同様で、この文が使用される文脈を想像することは容易であり、有意義な文である。

しかし、一人称・現在形の「私は意識がある」についてはどうだろうか。ウィトゲンシュタインの「語の意味とは言語内におけるその語の使用である」⁽¹⁾という語用論的意味論の立場からみると、「私は意識がある」という文はどういう場面で使用されるだろうか。このことを考えてみるために、この文の否定文「私は意識がない」を考えてみる。「私は意識がない」という文は、使用される場面が想像できないのではないか。自分に意識がなければ「私は意識がない」とさえ言うことができないからだ。従つて、「私は意識がない」という文は、使用される文脈を持ちえないので、語用論的にはナンセンスになる。ウィトゲンシュタインによれば、ナンセンスの否定はナンセンスなので⁽²⁾、「私は意識がない」の否定である「私は意識がある」もナンセンスになる。しかし「私は意識がある」は、語用論的にはナンセンスであっても言語文法的には正しい文である。理解不能というわけではない。では、「私は意識がある」という文はどういう文なのか。「私は意識がある」という文は、ウィトゲンシュタインの言う、通常の言語ゲームの基礎にある無数の「揺るぎないもの」の一つに該当するように思われる⁽³⁾。それは、通常の言語ゲームを意味ある（根拠づける）ものにする規則のような役割を持つ⁽⁴⁾一方、それ自身には根拠がなく⁽⁵⁾、それをあえて言葉にして表現することはナンセンスになるようなものごとである。

さて、一人称・現在形の「私は意識がない」は語用論的にはナンセンスな文である。

即ち、使用される文脈を持たない。しかし、同じ一人称・現在形であっても、感覚や感情などについての否定文はナンセンスではない。「私は何も見えない」とか「私は全く悲しくない」とか「私は何も考えていない」は、使用される文脈が考えられる有意な文である。従って、意識という語は、感覚や感情などの語とは異なる用法を持つ。

では、「意識」は、感覚や感情などとは別の特定の心的な何かを表現する概念なのだろうか。もしそうだとしたら、「私は意識がない」はナンセンスではない。なぜならその文は、感覚や感情の場合と同じように、感覚や感情とは別の特定の心的な何かを欠いているという意味で用いることができるからだ。従って、「意識」は特定の心的な何かではない。

では、「意識」は、感覚、感情、思考などで表現される心的概念全体のことであろうか。もしそうなら、例えば「意識がない」は「痛みがない」を含意するので、「私は意識がないので痛みがない」は有意なはずである。しかし、「私は意識がないので痛みがない」はナンセンスである。「私は意識がない」と言うことがそもそもナンセンスなので、それを根拠に痛みがないと言うこともナンセンスだからだ。従って、「意識」は心的概念全体のことでない。

このように「意識」という語は、感覚、感情等の語の用法と関連はするが、それらの語と同じレベルにあるものではないし、また、心的概念全体のことでなく、独自の用法を持つ概念であることが分かる。

さて、このように独自の用法を持つ「意識」であるが、「今、ここにある私の意識」という一人称・現在形の意識の内容はどのようなものであろうか。次節でこの内実を現象学的な記述によって明らかにしよう。

3 「今、ここにある私の意識」の内容—クオリア—について

私は今、机の上にあるパソコンの画面を見ながらキーボードのキーを打っている。私の視野の中心にはキーで打たれた文字がある。手元のキーボードやディスプレイの枠もぼんやりとはあるが見えている。これら以外にも机の上には本や書類、飲みかけのコーヒーカップなどが雑然と置かれているのが見える。机の端やパソコンの背後にあるカーテンもぼやけてはいるが見える。頭上からエアコンの音が聞こえる。コー

ヒ一の微かなにおいがする。私の左手は背中後ろに回って椅子の背もたれとの間にあり、右手はキィを打つか、時々顎を撫でる。足は組まれている。私はキィを打ちながら表示される文字を目で追って、そこにつづられた文に関連したことをあれこれ内語している。表現やそのつながりに違和感がないかどうか注意を凝らす。気分はいたって穏やかである……と、こう書いてはきたものの、これらは「今、ここにある私の意識」の内容を、正確に描いたものではない。ディスプレイに表示された文字の連なりから成る文に注意を向けてあれこれ内語している時、手や足の位置のことは意識しない。口の中の舌がどうなっているか、呼吸や心音の具合はどうかについても意識することはない。ディスプレイの枠や背後のカーテン等が目に入る時もあるが、ほとんど意識から外れている。ディスプレイに表示された文を見ながら内語して推敲している時でさえ、何度か瞬きしているはずである。だが、そのことは全く意識されない。しかし、部屋の電気が、ほんの一瞬でも消えればすぐにそのことに気付く（意識される）。瞬きも一瞬暗くなるはずであるが、そのことは注意しない限り意識されない。表示された文を見ながら考えている時は、エアコンの音もコーヒーのにおいも意識から外れている。しかし例えば、手や足の位置に注意を向ければ、文を見ることはもとより、内語による文の推敲もお留守になり、エアコンの音も意識から外れる。また、注意を手や足の位置からエアコンの音に向ければ、手や足の位置感覚は再び意識から外れる。内語しながらパソコンの画面を見ている時には、内語していることは意識される。しかしその時、手足が知らないうちに動いてその位置が変化してもそのことは意識されない。注意を向ける先々が変化することで、意識から外れたり、再び意識に現れたりする。

なお、パソコンの画面に注意を向けている時、エアコンの音が意識されないからといって、二つ以上の感覚を同時に意識することができないということではない。

人と話をしている時、私はその人の目（あるいは顔）を見ながらその人が話すのを聞く。その時私は、見ることと聞くことを同時に意識している。これが普通である。

さらに、私の前方にいる人がマイクを通じて話しているのを見る時、その声が私の後ろにあるスピーカーから発せられているとしても、私は前方にいるその人の口から音声が発せられているように聞く。また、二つの感覚だけでなく、三つの感覚を同時に意識することもある。

例えば、私は自分の目の前にある机を手でバンと勢よく叩いてみる。この時私は、手が机に当たるのを見、バンという音を聞き、軽い痛みと共に手が机に当たる感触を持つ。視覚と聴覚と触覚の三つの感覚を同時に意識するのである。たとえ脳神経学が、見るという視覚ルート、聞くという聴覚ルート、手の痛みという触覚ルートには、ニューロンの長さにそれぞれ違いがあつて、脳のそれぞれの感覚領域に届くのには時間差があることを教えるとしても、それでも私は、これら三つの感覚を同時の出来事として意識する。この場合、手を動かすという運動感覚もあるし、怒って机を叩く時などは更に感情も伴っている。

このように、一つの出来事を意識する時二つ以上の感覚や感情が同時に働いている。これが普通である。

さて、私は今、論文を書くためにパソコンの画面の文字を追って文に注意を向けている。この時、内語は続いている。ここで他のものに注意を向ければ、それまで意識していた文のつづりに対する注意や内語はその瞬間に飛んでしまう。しかしまた、一つのことに注意を向けて、それだけをずっと意識し続けることも難しい。特に感覚の場合、疲れてくることもあるし、慣れてしまうと意識されなくなることがあるからである。下着などは直接肌に触れるので、着た当初は肌に触れる感覚があるが、しばらくすると全く感じられなくなる。

また、文の綴りに注意しながら内語している時でさえ、その文とは全く関係のない考えが勝手に入り込んでくることもある。そのためそれらに邪魔されることなくずっと考え続ける(一つの意識を持ち続ける)ことは極めて困難である。エアコンの音や、手足の位置感覚が突然に意識されることもある。にもかかわらず、私は、邪魔されたり中断されたりすることなくディスプレイに表示された文字を見ながらずっと考え続けていると思っているし、人に聞かれればそのように答える。しかし実際は、「今、ここにある私の意識」の内容、何かを感じたり考えたりしている「今、この瞬間の私の意識」の容量は、とても移ろい易くて極めて小さいのだ。

従って、「今、ここにある私の意識」の実際の意識内容を表現しようとして、「私は今ここでディスプレイに表示された文字を見ながら内語している」と言っても、それは、「今、ここにある私の意識」の意識内容を正確に表現しているとは言えない。そ

これは、「今、ここにある私の意識」内容の一瞬の一端を切り取って、文として整理した表現だとしか言えない。しかしそれも不正確であろう。「今、ここにある私の意識」は、一瞬でも固定することなく、突然に変化し、様々に現れては消え、勝手に変化してやまないものだからである。従って、「今、ここにある私の意識」内容の一端を、一瞬でも切り取ることさえ困難なのである。

このように、固定することなく勝手に現れては消える「今、ここにある私の意識」内容、今この瞬間に感じたり考えたりしている私の意識の内容を、「クオリア」⁽⁶⁾と呼ぶことにしよう。クオリアは、今この瞬間に、ここにある私に意識されているもの、意識内容、即ち、今この瞬間に意識に現れている感覚、感情、思考等のことであって、現れては消え、時々刻々、常に変化してやまない、正にその一瞬に意識に現れているもの、注意が向いているもの、その相貌、その瞬間に意識を彩っているものことである。「今、ここにある私の意識」の内容は、常に変化してやまない。今この瞬間の意識内容が変化することは、その相貌、即ちクオリアが変化することである。それは、変化する直前にあったクオリアが失われ、新たなクオリアにとって変わることである。そして、失われたクオリアは、 $\circ\circ$ を見たとか、 $\Delta\Delta$ を聞いたという出来事の記憶として表現されることもあるが、意識されていた際のクオリアの彩りを失う。考えや想像などのクオリアは、ほんの数分前のことでも自分のしていた内語を正確に思い出すことは難しく、その多くが忘れ去られる。行為でさえ忘れ去られる。外出する際にドアに鍵をかけたかどうか、ほんの少し前のことでも自信がなくなる。かといって、入浴している時とか、ジョギングしている時など全く関係ない時に、以前から思い悩んでいた問題の解決法が突然ひらめくこともある。

このように「今、ここにある私の意識」としてのクオリアは、絶えず変化してやまない。しかし、私に意識がある限り、私は常に何らかのクオリアを持つ。常に何かを感じたり考えたりしているのである。そしてこのクオリア（「今、ここにある私の意識」の内容）には、常に必ず「私」というタグがついている。「今、ここにある意識」という限り、それは「私」の意識以外の何物でもない。クオリアを失うことは、「今、ここにある私の意識」を失うことであり、私は意識を失うことと同義である。

しかし私は、このようなクオリアを無条件に持つわけではない。エアコンの音が聞こえるとか、ディスプレイの文字を見ているとか、内語して考えるという「今、ここ

にある私の意識」内容（クオリア）を持つには、様々な前提条件が必要である。次節では、クオリアを持つには前提条件が必要であることを明らかにして、その前提条件がどのようなものかについて論じる。

4 「今、ここにある私の意識」を持つのに必要な前提条件について

「今、ここにある私の意識」の内容として、「私は今ここでディスプレイに表示された文字を見ている」とか「私は今エアコンの音が聞こえる」とか表現するとしても、ここにはある前提があらねばならない、と私は言いたい。それは、今自分の目の前にあるのがパソコンの表示画面であること、見ているのが日本語の文字であること、頭上で音がしているのがエアコンであること等を、改めて自覚することがないということである。それらは当然のこととしてその表現の前提にされている。あるいは、パソコンの画面に向かって文を作成している私の構えの内に、それらはすでに織り込まれている、と言ってもよい。従って、もし私が外にいて、部屋にいる時に聞くのと同じエアコンの音を頭上に聞いたとしたら、上を見上げて音の正体が何か知ろうとするだろう。だが、部屋の中でその音を聞く時には、わざわざ見上げて調べることはしない。もしあるとすれば、いつもと違う音がするなど、通常とは異なる場合だろう。

すると、部屋の中で今この瞬間に聞こえるエアコンの音（クオリア）がエアコンの音として聞かれるというそのことは、その聞かれている当の音（クオリア）の内に織り込まれているのだろうか。あるいはその時の私の状況が、他ならぬエアコンの音として私の意識に現わしているのだろうか。私は両者あつてのことだと考える。即ち、これまでにエアコンの音に馴染んできたという私の経験と、自分の部屋の中に居るといふ私の置かれている状況とが、その音が他ならぬエアコンの音として「今、ここにある私の意識」の内容、即ちクオリアを色づけている、と考える。経験上馴染んでいる音が、適切な状況の中で、エアコンの音（クオリア）として聞かれるのである。そして、この場合、逆説的ではあるが、そうした状況の中で聞かれるエアコンの音がエアコンの音だということは、取り立てて意識されることがない。あれは何の音かと聞かれれば躊躇なくエアコンの音だと答えるだろうけれど。しかし、エアコンの音が止まったり、いつもと違う音がしたりすればそのことに気付く。通常エアコンの音をエアコンの音として意識しないのは、それが馴染みであることと共に、しかるべき状況

の中に埋め込まれているからである。そのことは、エアコンの音に驚かないという感情にも反映されている。

また、ディスプレイに表示されている模様が日本語の文字だということも、当然のことながら改めて確認することはない。私は日本語が母語である。日本語は、私が聞いたり話したりすることはもちろん、書いたり読んだりすることを幼少のころから学んできた、私にとって極めて馴染み深い言語である。表示された文が文法上おかしくないかとか、文と文のつながりにおかしなところはないかということに注意することはあっても、それが日本語かどうかを疑うことはない。ディスプレイに表示される文字を見ている私の意識の内容（クオリア）は、模様ではなく正に日本語である。むしろ日本語の文字ではなく何かの模様として見るの方が極めて困難である。またこの時、私は表示されたものを日本語として解釈したり判断したりしているのでもない。端的に、自動的に、日本語を見る。これは、私が日本語に馴染んできたことの結果である。しかしながら、ある種の言語は、私には文字としてより模様として見るほうがずっと普通のことがある。

従って、私がエアコンとはどのようなものかを知らず、またそれが出す音を知らずに、エアコンを見たりその音を聞いたりすれば、その時の私の反応は、それを知っている今の私の反応とは全く異なったものになるであろう。また例えば、医者がCTの画像からそこに病変を見つけても、医学的な専門知識を持たない私などはそれを見ても分からないだろう。また、「ウサギアヒル」として知られる絵も、アヒルを見たことはあってもウサギを知らない人にはアヒルとしか見えないであろう。

私の知識や経験、即ち私が受けてきた教育、生活環境、文化、社会、そして私の置かれた状況、これらの中で培われてきた私の構えの内に、クオリアを色づけるものがある。知識や経験が異なればクオリアの彩りも異なり、それに伴う驚きや喜びなどの感情も違ったものになるだろう。

だが、今ここにある私の意識の内容、そのクオリアの中でも、私の知識や経験、置かれた状況に左右されることなく、いわば遺伝子レベルでプログラムされた仕様によって色づけられているものがある。錯視がその例である。

全く同じ波長の色でも、それが背景の暗い所に置かれる場合と明るい所に置かれる場合とで、明るさが違って見える。また、フィック錯視と呼ばれるよく知られた錯視

の一つであるが、同じ長さの線分でも、一方を横にもう一方を縦に置くと縦の線分の方が長く見える。

こうした錯視は、比較される二つの色や長さが実際には同じだということを知っていても、違って見える。同じに見ることは困難で、このことは、知識や経験、状況に影響されない。訓練によって修正されることもない。

さらに、このような錯視に限らず、人の視覚や聴覚などの感覚は、遺伝子レベルで閾値の範囲が決まっている。その能力に限界がある。努力や訓練によって、視力や聴覚の標準値レベルをある程度超えることもできるが、例えば紫外線や赤外線は努力すればそれが見られるようになるというものではない。このように、感覚には、知識や経験、努力や訓練に影響されないものがある。

従って、今、ここにある私の意識の内容（クオリア）には、大きく二種類のものがある。知識や経験等に影響されるものと影響されないものである。そして、前者の知識や経験等に影響されるクオリアは、置かれた状況の違いによっても異なるし、学習や訓練の程度によっても変わりうるが、後者のクオリアにはそのようなことはない。

このように、クオリアには、私の知識、経験等に影響されるものとされないものがあり、それらは実際には混ざり合ってクオリアを彩っている。

さて以上のように、「今、私に聞こえるエアコンの音」という、今この瞬間に私の意識に現れているクオリアも、無数の前提のもとに成り立っている。その前提というのは、遺伝子レベルで規定されている感覚能力のほかに、私のこれまでに得た知識や経験に基づくものや、置かれている状況等無数の事柄のことである。これら全てを取り上げることはできない。例えば、普段聞くエアコンの音が当のエアコンの音（クオリア）として聞かれる前提には、冷蔵庫や電子レンジの音、車や飛行機のエンジン音、雨音、子供の泣き声、コンサート会場でのオーケストラの演奏等、音に関わるこれまでの私の無数の経験がある。また音に関すること以外にも、エアコンの取り付けや故障などエアコンに関わる知識、部屋を暖めようという志向性、さらには、日本語を母語にしているとか、「日本には四季がある」、「織田信長は本能寺で明智光秀に殺された」、「地球は自転しながら太陽の周りを公転している」等無数の知識や経験が前提にある。「地球は100年前にも存在していた」⁽⁷⁾とか「 $12 \times 12 = 144$ 」⁽⁸⁾のようなウィ

トゲンシュタインの言う「揺るぎないもの」もその前提にある。「私の家には地下六階に至る階段はない」⁽⁹⁾のようなこれまで考えたことのないものもある。このように無数にある前提は、「今、ここにある私の意識」の内容(クオリア)に直に現れているのではなく、いわば埋もれていてクオリアに彩りを与えている。このような前提無しに、彩りあるクオリアはあり得ない。

では、「今、私にエアコンの音が聞こえる」と言う時、「今、ここにある私の意識」内容(クオリア)に正にエアコンの音という彩りを与えているこれら無数の前提は、直に現れていないとするとどういった心的状態としてあるのだろうか。既に述べたように、クオリアがあるために必要なこうした無数の前提は、知識であったり、信念であったり、志向性であったりする。ウィトゲンシュタインは、心的状態を表す心的用語を、本物の持続を持つものと持たないものに区別する。感覚や感情は本物の持続を持つ特定の心的状態である。「本物の持続を持つ」とは、例えばサイレンの音のように始まりと終わり、中断があり、強弱や音色が変化すればそのことに気付くことである。これに対して知識や信念、意図は、本物の持続を持たず、特定の心的状態ではない。それは状況に応じて様々な心的出来事(感覚や感情)から成るものである⁽¹⁰⁾。本物の持続を持たない心的状態は、意識の中断や注意の移動によって中断されることがない⁽¹¹⁾。ウィトゲンシュタインはこのような本物の持続を持たない心的状態を「心的傾性(seelische Disposition)」と呼ぶ⁽¹²⁾。従って、「今、ここにある私の意識」の内容(クオリア)に彩りを与えるのに必要な無数の前提は、ウィトゲンシュタイン的には心的傾性という心的状態としてある、ということになる。

さて、感覚や感情など人の心的現象は、脳生理学等の自然科学によって説明できるとする立場がある。自然科学は、「今、ここで私にエアコンの音が聞こえる」というような「今、ここにある私の意識」を説明できるのだろうか。最後にこの問題を取り上げよう。

5 脳生理学等の自然科学は「今、ここにある私の意識」を説明できるか

例えば「今、ここで私にエアコンの音が聞こえる」というクオリアは、「感覚は脳

の中のニューロンの電気・化学的変化の結果である」という説明とどのように関わるのだろうか。それは、ニューロンの電気・化学的変化を原因として、その結果クオリアが生じるという因果関係として理解されるべきなのか。そしてクオリアは、こうした脳生理学等の自然科学の記述に還元されると考えるべきなのか。

物理学を典型とする自然科学は、実験によって自然現象の内に因果関係に基づく法則を見出し、それを数学的に表現して、現象をその法則によって説明する。物理主義は、感覚、感情、欲求、信念等の人の心的現象についても物理的言語によって説明（還元）できるとする立場である。従って、「今、ここで私にエアコンの音が聞こえる」というクオリアも、物理主義によれば、私の「脳の中のニューロンの電気・化学的変化によって生じる」という脳生理学（物理学・化学）の言語で説明できるとされる。だがここには根本的な問題がいくつかある。

第一に、クオリアは、脳生理学等の自然科学的（物理的）な説明とどのような関係にあると考えるのか、ということである。クオリアは、物理的な出来事を原因とする結果としての現象なのか、あるいは物理的な出来事に伴う随伴現象なのか。それとも物理的な出来事を基礎とする創発なのか、あるいはまた、そもそもクオリアというものではなく、あるのは物理的な現象だけなのか、という問題である。

第二に、クオリアは、「今、ここで私にエアコンの音が聞こえる」のように、人や時や場所が異なることによってその内容が変わる一人称・現在形で表現される。しかし、脳生理学等の自然科学的な説明は、説明するものも説明されるものも無人称で非時間的で非場所的である。それは人や時や場所の違いによって内容が変わることがない。自然科学による説明は、「今、ここで私にエアコンの音が聞こえる」のような一人称・現在形の表現とは正反対の極にある。従って、一人称・現在形で表現されるクオリアを無人称で非時間的で非場所的なもので説明するということが、どのように理解されるのかという問題である。

私は、第一の問題も第二の問題も、もともとの問題の立て方が誤っていると考える。始めにあるのは、例えば「今、ここで私にエアコンの音が聞こえる」というような一人称・現在形で表わされるクオリアである。そして、脳生理学等の自然科学的な説明は、クオリアを持つために必要な無数にある前提の一つなのである。それは他の無数の事柄とともに心的傾性としてクオリアに彩りを与えている。このことは前節で述べたとおりである。このようなクオリアを持つのに必要な無数の前提は、命題的態度と

呼ばれる述語で語られる that 節の中身である。それらは無人称で非時間的で非場所的である。従って、脳生理学等の自然科学的な説明は、「今、ここで私にエアコンの音が聞こえる」というような一人称・現在形で表現されるクオリアを根拠づけるものでは全くない。ましてやクオリアが、脳生理学等の物理的言語に還元できるとか、ニューロン等の物理的な出来事に随伴するものだとか、物理的出来事を基礎とする創発だということには全くならない。そうではなくて、そうした説明は、「今、ここにある私の意識」内容（クオリア）を彩る無数にある前提の一つだ、ということである。クオリアを脳生理学等の物理的言語によって根拠づけようとすることは、本末転倒、カテゴリーミステイクも甚だしいものである。脳生理学等の自然科学的な探究は、説明されるものも説明するものも、どちらも無人称で時や場所の違いによって内容が変わることがない。それが脳生理学という自然科学の仕事である。これに対して「今、ここにある私の意識」内容は、人や時や場所が異なることによって全く変わってくる。脳生理学等の自然科学的な説明に、「今、ここ、私」という一人称・現在形が入ってくる余地は全くないのである。

だからといって、意識についての脳生理学等の自然科学的探究や説明が無意味だとか否定されるべきだ、ということではもちろんない。意識についての脳生理学などによる自然科学的な探究は、これはこれとして進められるべきである。その探究は、説明するものも説明されるものも「今、ここ、私」には関係しない。そしてその探究の結果は知識あるいは信念（心的傾性）として、「今、ここにある私の意識」内容、すなわちクオリアを彩る無数の前提の一つになると理解されるのである。

註

- (1) *PI* §1,6,35,37-45,73,140,141
- (2) *CL* p.217
- (3) ウイトゲンシュタインは *OC* の中で「揺るぎないもの」に該当する事例を数多く挙げている。「私には脳がある」(*OC* §4)、「車は大地から育ててこない」(*OC*

§279)、「私は今英国で暮らしている。」(OC§420)等がそうである。

- (4) OC§98
- (5) OC§166,253,559
- (6) クオリア(qualia)の定義的な意味は、「意識経験の主観的な諸性質。事例として、砂糖の味、朱色の見え、コーヒーの香り、猫のゴロゴロなる音、つま先をぶつけた時の感じ、がある。」(*The Oxford Companion to Philosophy*p.736)であるが、本稿では、「今、ここにある私の意識」の内容、今この瞬間に感じたり考えたりしている私の意識内容、としている。
- (7) OC§231
- (8) OC§43
- (9) OC§398
- (10) *PI*§149 欄外(a), *RPP2*§63
- (11) 知識や信念等は睡眠によって意識が中断されたり、何かに注意がそがれたりしても影響されないことをいう。(*RPP2*§45, *PI*§149)
- (12) *RPP2*§178

参考文献

- ・ Wittgenstein, Ludwig, *Philosophical Investigation*, Trans. G.E.M. Anscombe, 2007, Basil Blackwell, 3rd edn.2001、(『哲学探究』、引用において *PI* と表示)
- ・ _____, *Remarks on the Philosophy of Psychology, vol II*, Edited by G. H. Von Wright and Heikki Nyman, Trans. C. G. Luckhardt and Maximilian A. E. Aue, Basil Blackwell,1980、(『心理学の哲学 2』、引用において *RPP2* と表示)
- ・ _____, *On Certainty*, Edited by G.E.M. Anscombe and G.H. von Wright, Translated by Denis Paul and G.E.M. Anscombe. Basil Blackwell Oxford, 1979、(『確実性の問題』、引用において *OC* と表示)

- ・ _____, *Cambridge Letters Correspondence with Russell, Keynes, Moore, Ramsey and Sraffa*, Edited by Brian McGuinness and G.H. von Wright, Blackwell Publishers, 1995 (引用において *CL* と表示)
- ・ *The Oxford Companion to Philosophy* Edited by Ted Honderich Oxford University Press 1995
- ・ ウィトゲンシュタイン、『ウィトゲンシュタイン全集』、大修館書店